〈　配　点　〉

一　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　各２点×８＝16点

二　　　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　問六⑵　６点

他　各３点×９＝27点

（問四　は完答・順不同可）

（問五　問八　は完答）

三　　　　　　　　　　　　　　 問一・問二　各６点×２＝12点

他　各３点×７＝21点

四　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　各３点×６＝18点

（問五　は完答）

〈　解　説　〉

一　漢字の読み書き

⑴　「哀れ」は、かわいそうな状態のこと。「哀」の音読みは「アイ」で「」などの熟語がある。

⑵　「迎」の訓読みは「むか（える）」。「」「」などの熟語がある。「歓」には喜ぶという意味がある。

⑶　「撃」の訓読みは「う（つ）」。「」「」などの熟語がある。

⑷　「弁」には話すという意味がある。「弁解」「熱弁」などの熟語がある。

⑸　「誓」の訓読みは「ちか（う）」。「宣誓」は、大勢の前で誓いの言葉を述べること。

⑹　「卑屈」は、いじけて、必要以上に自分のことをばかにすること。

⑺　「架」の訓読みには、「か（かる）」のほかに「か（ける）」もある。音読みは「カ」。「橋を架ける」という意味の「」などの熟語がある。

⑻　「硫黄」は特別な読み方。「硫」の音読みは「リュウ」で「」などの熟語がある。「黄」の訓読みは「き」「こ」、音読みは「オウ」「コウ」。「」などの熟語がある。

二　論説文の読解

《出典》『的進化論　１％の奇跡がヒトを作った』（新潮社　二〇一六年）による。

　　著者は分子古生物学者。一九六一年生まれ。化石中に存在するタンパク質やＤＮＡの、約五億年前のカンブリア紀における動物の多様化の研究などをおこなっている。主な著書に『「性」の進化論講義』、『未来の進化論』、『若い読者にる美しい生物学講義』などがある。

＊問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

**問一**　に「にすんでいる」「を見つけたり空気を呼吸したりするときに、とても役に立った」という表現があることに着目する。「浅瀬」、つまり、川や海などの水の浅いところにいて、獲物を見つける・空気を呼吸するというのだから、水の中から顔を出すということが書かれていることになる。【ア】は直前でのことが書かれているので獲物を見つけることには関係があるが、呼吸とはつながらないので、合わない。【イ】は前後で書かれているのは骨の話であり、この時点では骨と水の中から顔を出すこととの関係はわからないので、合わない。【ウ】は「立てせ」について書かれているが、【イ】と同様にこの時点では「腕立て伏せ」と水の中から顔を出すこととの関係がわからないので、合わない。【エ】は「腕立て伏せ」ができることで「水面から顔を出すことができる」ようになることが述べられたところなので、ちょうどつながる。【オ】は空気呼吸そのものの話をしているので、それについて「空気を呼吸したりするときに、とても役に立った」というのはつながりがおかしいので、合わない。【カ】は「あまり速く動くことはできなかった」という話なので、「獲物を見つけたり空気を呼吸したり」という話題とは外れており、合わない。

**問二**　ａ　は、直後で「……の骨の形が」とあるので、本文からエウステノプテロンの「骨の形」について述べている部分をさがす。すると、「エウステノプテロンの胸ビレと腹ビレ」の「骨の形」が「上腕骨、橈骨、尺骨に似ていた」と述べられている部分が見つかる。　ｂ　は、エウステノプテロンを「ハイギョ」として述べた部分なので、本文から同様にハイギョと比較しているところをさがすと、ハイギョよりも「四肢動物の肢の骨のパターンである『一本、二本、手首の骨、指の骨』」に近いと述べられている部分が見つかる。　ｃ　は、ここまでの内容から導かれる結論であり、「エウステノプテロンが陸上に上がれるといされた」理由を直接述べたところである。本文で確認すると「エウステノプテロンは、腕（あるいは）を持つ魚だったのだ」と述べたあとで、それを理由として「陸上で生活していたと勘違いされても無理はない」とまとめている。

**問三**　二つめの　Ａ　を含む一文のはじめに、「もし腕や脚がただのまっすぐの一本の棒だったら」とあることに着目する。「まっすぐの一本の棒」でないことが重要なのである。したがって、二つめの　Ａ　の「腕や脚を　Ａ　ることが必要なのだ」は、「腕や脚をまっすぐではなくすことが必要なのだ」ということになる。「まっすぐではなくす」ということから、「曲げる」「折る」などが考えられるので、これらや同様の表現が使われている部分がないかを確認すると、終わりから六段落目に「体を曲げる」があるので、ここから前後につながるように抜き出す。

**問四**　Ｂ　は、直前の「腕立て伏せができれば」を直後で「手首があれば」と言いかえて説明し直しているので、表現を変えて説明するときのカ「つまり」が当てはまる。　Ｃ　は、直前で「水中と陸上と両方で生活できる」と述べ、直後では「あまり水辺から離れることはできない」という、前の内容を打ち消すような内容を述べているので、逆接の**オ**「とはいえ」が当てはまる。

**問五**　**ア**は「腕立て伏せができる魚はそれによって次第に手首が発達していって、やがて四肢動物に進化した」が合わない。腕立て伏せができることで手首が発達したのではなく、手首があることで腕立て伏せができるのである。**イ**は「腕立て伏せをすることで陸上に出られる強い身体を作り、魚類を四肢動物に進化させた」が合わない。腕立て伏せは「強い身体」を作るわけではなく、ティクターリクが魚類を四肢動物に進化させたわけではない。**ウ**は「腕あるいは脚をもつ魚はいるが、それだけでは陸上に出ることは難しく、腕立て伏せという行為ができる身体構造を持つかどうかが四肢動物への進化の分かれ目と言える」が、「腕や脚がただのまっすぐの一本の棒だったら」起きあがることができず、「腕立て伏せができれば」水面から顔を出せるという、魚類から四肢動物に変わるための条件と合っている。**エ**は「空気呼吸ができるという進化へとつながる道筋」が合わない。空気呼吸ができるようになったかどうかが魚類と四肢動物の違いといったことは述べられていない。**オ**は魚類と四肢動物をつなぐものを「水中と陸上の両方で生活できる初期の両生類」としているところが合わない。両生類は「完全な四肢動物」である。

**問六**⑴直後から二つの「仮説」をしたあとで、「でも、なんだか変な話だ」と評価している。そのあと、具体的には二つめの仮説について「変な」ところを説明しているが、同じ理由で一つめの仮説も「変」と考えることができる。

⑵　二つめの仮説の「変」なところは、具体的に説明されている。肢がある大人は者かられることができるが、肢がまだない子供はそれができず、捕食者に食べられてしまうことになる。それでは意味がないのではないかというである。そして、直接は書かれていないものの、一つめの仮説にも同様のことが言える。上がった池から別に池に移れるのは大人だけであり、子供はそれができない。つまり、これらの仮説のような目的で肢が進化したのなら子供にも肢があった方がいいはずであり、しかし実際にはそうなっていないので、仮説はおかしいのではないかということである。

**問七**干上がった池から別の池に移動するということなので、「池から出る」「池へ戻る」でよさそうだが、池というのはあくまでこの仮説の中で挙げられたたとえの一つであり、川でも湖でも同じことなので、すべてをまとめた「水」を用いている「水から出る」「水へ戻る」が最も適切である。

**問八**　ａ　は、エウステノプテロンについて、「体の形」と並んでいるものである。本文では、「体が流線型であること、眼が横についていること」と並んで、それらを理由に「完全に水中に生息していたと考えられている」と述べられている。　ｂ　は、アカントステガについて、大きなビレと並んで水中で生活していたと考えられる理由になるものである。本文では、大きな尾ビレは陸上を歩くのに適さないことを説明したあとで、「骨格の形から見て、アカントステガはエラも持っていたと考えられるのだ」と述べている。

**問九**　前の部分の「魚は陸に上がるために肢を進化させたのだと、かつては考えられていた……肢は、陸上を歩くためにあるのだから」という部分と、「肢は　Ｅ　進化したわけではないのかもしれない」が対応していることに着目する。「かつては」肢は「陸に上がるため」「陸上を歩くため」に進化したと考えられていたが、仮説がおかしいと感じられることや、「進化史上最初」の肢のある生き物たちが完全に水中にすんでいたとされることから、「ひょっとして」それは間違いではないかと考えられるようになったということである。したがって、**イ**「歩くために」が適切。**ア**「陸でも暮らせるために」は「陸でも」という水陸両生を求めたということは述べられていないので合わない。**ウ**「魚類個々の意志で」は「個々の意志」についての記述はないので合わない。**エ**「陸に上がるためだけに」は、これを「……わけではない」と否定すると「陸に上がる」以外の目的があることを示すことになるが、それについての記述はないので合わない。**オ**「陸上で」は直前の「水中で」と対応するが、これを当てはめても「肢は陸上で進化したわけではないのかもしれない」という、前の「肢は水中で進化したのではないか」と同じ内容の繰り返しにしかならないので、「ひょっとして」という新たな仮説を述べようとしているときの表現と合わない。

三　小説文の読解

《出典》『空より高く』（中央公論新社　二〇一二年）による。

　　著者は小説家。一九六三年生まれ。一九九九年『ナイフ』で文学賞、『エイジ』で賞、二〇〇一年『ビタミンＦ』で賞、二〇一〇年『』で文学賞を受賞。主な著書に『流星ワゴン』、『』、『カシオペアので』などがある。

＊問題作成の都合上、文章を一部改変したところがある。

**問一**　あとに続く言葉が「……にかぎって、にこやかに笑う顔が……」であることに注目する。ここでの「……にかぎって」は、「楽しみにしていた外出の日にかぎって雨が降る」のように、それが起こることが望ましくないときや適切とは言えないときに、ちょうどそれが起こる場合に用いる表現である。したがって、この「こういうとき」は、「にこやかに笑う顔」がかぶことが適切ではないときということになる。このときの話題は、交通事故であり、母から「か心当たりない？」と聞かれてドカの顔が浮かんだ場面である。「」は交通事故を起こした「心当たり」としてドカの顔を思い浮かべたのだが、それが「にこやかな笑顔」だったので「こういうときにかぎって」と感じたのである。

**問二**　「入学以来の無無欠席記録」を保持していたドカが欠席したので、「僕」は、やはりゆうべの交通事故を起こしたのはドカだったのではないかと感じている。しかし、ドカが事故を起こしたと思いたくない気持ちがあるために、ドカの他にも欠席者がいないか、つまりドカの他にもゆうべの交通事故を起こしたと考えられる人物がいないかを確かめたくなったのである。

**問三**　「さりげなく」は、意図を表面に出さないようにしながら行う様子。あまりあからさまに聞いて変に興味を持たれ、おおごとになってしまうことを避けたいという気持ちから、「ついでに」世間話のように聞いたのである。

**問四**　直後に「理由はよくわからない」とあるので、「なんとなくうれしかった」理由自体は「僕」自身にも説明がつかない気持ちである。ただし、そのあと続けて、「もしも職員室のドアを開けた、他の先生たちとおしゃべりしているジン先生を見たら、そのまま引き上げてしまったかも」とあることから、「僕」の中には、ジン先生に他の先生たちとは違った存在であってほしいと感じている気持ちがあることが読み取れる。**ア**と**ウ**はこれに当てはまらない。また、**エ**は「うれしかった」というのが「先生に出会えた幸運」ということになっており、ジン先生が職員室でもやはり他の先生とは違う存在だということへのうれしさとずれており、**オ**は「生徒の期待に応えるために同僚と距離を置いてくれている」のであれば実際は普通の先生と変わらず、生徒を失望させないために強いて独特な先生であることを演じていることになってしまうのでおかしい。したがって、正答は**イ**である。

**問五**「」は、納得がいかず不審に思うこと。こうした意味を知らなくても、「うん？」と「僕」を見ているジン先生の様子から、何か疑問を感じているということが読み取れる。**ア**は「怪訝」の意味やジン先生の様子に合っている。**イ**は「何かたくらみがあるのか」というように生徒に疑いの目を向ける先生として、ジン先生はかれていないので、合わない。**ウ**は「思い通りにならず」とあるが、ジン先生が「僕」に対して何か思い通りにしようとした場面ではなく、したがってジン先生が「」になるわけもないので合わない。**エ**は「真実をごまかそうとして必死でいる」がこのあと特に隠そうとせずにドカの交通事故について話していることと合わない。**オ**は「怪訝」の意味ともジン先生の様子とも合わない。

**問六**　**ア**や**ウ**のようにジン先生の中で何らかの変化があったとしても、実際にジン先生の背中が大きく、分厚くなるわけではない。これは「僕」にとってそう見えたということである。ドカのことを心配し、不安を感じていた「僕」は、ジン先生からをかれ「だいじょうぶだ、だいじょうぶ」と言ってもらったことで、ジン先生にたよりがいのようなものを感じたのである。それによって、「僕」の目に映るジン先生の姿が大きく分厚く見えたと考えられる。**エ**や**オ**も「僕」の内面の反映として述べられているが、「僕」の「気持ちが大きくなってきた」ことや「いつものジン先生だと納得できた」こととジン先生が大きく見えたことの間に因果関係はないので合わない。

**問七**　「をす」は、やるべきでない行動をしないようにあらかじめ念を押すこと。刺すのは針で釘は打つものだという感覚から間違わないように気をつける。

**問八**　「めやまし」を言ったり「現実的に」なにかをしたりするわけではなく、「とにかく会いたい」という気持ちである。同じように、何かが具体的にできるわけではないがとにかく会いたいという気持ちが表されている部分をさがすと、「ダッシュでドカの家に向かいたかった。ドカに会いたい。ドカの顔を見て、にいてやりたい。」が見つかる。

**問九　ア**　「僕」がクラスの友だちであるドカのことを「に心配」していることは確かだが、「自分のことは二の次にして」といった内容は本文から読み取ることはできない。

**イ**　「僕」の「母」が交通事故について話題にし、「僕」に「誰か心当たりない？」とたずねているが、「息子思い」の気持ちから来る行動というほど親身になっているわけではなく、合わない。

**ウ**　「僕」がジン先生を訪ねたとき、ジン先生は職員室で他の先生たちの世間話に加わらずに指導書を読んでおり、悪そうにしてはいたが、世間話に加わっていなかったのがいつものことかどうかはわからないので、「他の先生たちとはあまり親密ではなく、職員室では一人で過ごす」というのは合わない。

**エ**　本文は確かに「僕」と母やジン先生、仲間たちとの会話が書かれているが、「ドカに対して抱いている心情」が表現されているのは主に仲間たちとの会話の場面であり、特に母との会話の中ではまだそうした心情が表現されているとは言い難いので合わない。

**オ**本文は「僕」の視点で展開しており、部③のように「うれしかった」などと書かれているところはあるが、そうした直接の心情表現は少なく、多くは「僕はりんだ」「ゆるんでいたネクタイをめ直した」「をんでうつむいた」などの言動やから心情を読み取るように書かれているので、合っている。

四　古文の読解

《出典》『物語集』

＊問題作成の都合上、表記を一部改変したところがある。

**問一**「かなしき」と読むが、用いられている漢字が「愛」であることと、「子多しとへども（子供が多いといえども）」ということから、大勢いる子供たちの中でも最もかわいいと感じている子供だという意味であることを読み取る。

**問二**「ゑ」は現代仮名いの場合は「え」に直す。「を」は助詞なので、「お」に直さず、そのままにする。

**問三**の親は「来たりて我れを見るべし」と願っている。「見る」は「みとる。死に際に付きそう」という意味なので、これを願うときの表現でまとめる。

**問四**　直後に「」とあることに着目する。直前で、「をき」とあるので、けむりを出すのはである。

**問五**陽勝仙人がいるのは、「祖の家」の「屋の上」である。ａは「祖」、ｂは「家」、ｃは「屋」にあたるが、ａは二字と指定されているので、「」をき出す。

**問六　ア**は「陽勝仙人が家を捨てて出ていったことで自らを責め」、**イ**は「くなるの親を回復させた」という内容がないのでそれぞれ合わない。**ウ**は「仙人はいなくなっていた」のではなく、声だけが聞こえて姿は見えないということになっていたので合わない。**エ**は「もう二度とは来られない」とは言っておらず、逆に毎月来るということを言っているので合わない。**オ**は陽勝仙人が親に言った「父母の恩徳を報ぜむ」という言葉と合っている。

〈現代語訳〉

　　陽勝仙人の親が、故郷で病気にかかって苦しんでいたが、親がなげいて言うには、「わたしは子供が多いといえども、陽勝仙人はその中でもかわいい子である。もし、わたしの心を知ったならば、来てわたしの死にに付きそってもらいたい」と。陽勝は、神通力をもってこのことを知って、親の家の上に飛んできて、をとなえた。ある人が（外に）出て、屋根の上を見るが、声は聞こえるが姿かたちは見えない。仙人が親に申すには、「わたしは、永久に火宅の世界をはなれて人間界に来ることはないのですが、孝養のために無理に来て、経を読み言葉を交わすのです。毎月十八日に、香をたき花を散らしてわたしを待ってください。わたしは、香のけむりをたずねてここに下りてきて、経を読み仏法を説いて、父母の恩徳を報じましょう」と言って、飛び去った。